

U35 のメンバーが市民にわかりやすくレポートします！

## 傍聴記

10年後の自分と、京都のまちの、  
ミライとモンダイを考える。

## 京都市基本計画審議会

レポーター 松村 幸裕子さん



教育と福祉が手を取り合うことで、当事者を取り巻く環境が変わっていくのではないかと考える26歳。京都に生まれ育った教育系の大学院生。

## 第5回すこやか部会

開催日：平成22年3月26日（金） 会場：京都市総合教育センター

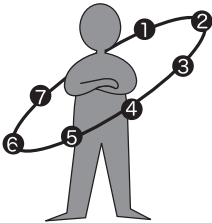
主な議題：基本計画第1次案の分野別方針の検討（学校教育、生涯学習、子育て支援、保健医療、障害者福祉、高齢者福祉、地域福祉）

## POINT

1

7つの分野を見渡す  
審議のものをチェック

これまで3回に分けて議論されてきた7つの分野を一度に見渡すことで、分野横断的な考え方や意見が出されました。例えば、「地域の居場所づくりと生涯学習の一体化」、「保健医療に限らない総合的な自殺対策」などです。短い時間の中で委員の意見が場に蓄積されていく印象を受けました。

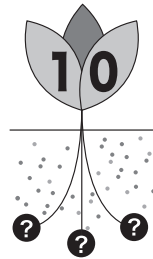
会議の  
ポイント

## POINT

2

数値目標は慎重に  
根拠と指標の再検討を

審議されるたき台として出された資料には、10年後に達成する数値目標の根拠がわからないものが多くあり、指摘がたくさん入りました。計画として特に、年間自殺者、障害者雇用率、趣味・学習活動に取り組む高齢者の割合などについて、目標値を設定する難しさが指摘されました。計画に掲げる達成する指標をより注意深く検討すべきであると感じました。



会議を傍聴して思ったこと

これまで行われた3回の審議を踏まえながら、7つの政策分野を見渡した形での審議となりましたが、以前に審議された部分が反映されていない部分が見られ、その部分を委員が指摘する場面が多かったように思います。すこやか部会で話し合われている7つの分野は、量ではなく質を扱うことが多く、その質に関して事務局側と審議委員のとらえ方の相違があると感じました。審議委員が現場の前線で感じているものを基盤として、これからの10年間で京都がどのように変わっていくべきなのかを文章化していくことが求められるのではないかと思います。

これからの京都を市民自らの手で作りあげていくのに必要な行政の政策指針を話し合うことは、いま市民の中にある表層的な問題についてばかりではなく、価値観や意識など、深層にあるものについても分析し、明確にしなければならないと考えます。「こうあってほしい京都」を作りあげていく市民の第一歩を支援するのが行政であるのならば、足りないものや変えていきたいことをはっきりと明示することから始まるのではないのでしょうか。前例がないとか、一部の反発を気にして、現状の問題を見ないふりするところが変われば、市民の行動も変わっていくと思います。

京都の未来に向けた提案

今年は10年に一度の、京都市の10年後を考える年です。  
市政をよく知り、よく考え、利用し、参加し、仲良くなろう

